

研究成果とその評価

藤本一美編『ウォー・ポリティクス～「政治的危機」と指導者の群像』（志學社、2011年）

末次俊之



本書は、多数の死傷者を出し悲惨な結果をもたらした第二次世界大戦期に、各国の政治指導者たちはいかなる原理・原則やイデオロギーを掲げ、国家を挙げての全面的な武力対立といった「政治的危機」に対応していったのかを、連合国側および枢軸国側の指導者の中で主要な人物を取り上げて、彼らの経歴をたどることを通じて、先の大戦の実態、さらには戦争の悲惨さを読者に伝えようとするものである。

本書のタイトルに掲げられている「ウォー・ポリティクス」とは、編者によれば、「戦争にいたる背景、戦争の経緯、および戦争の結果に関わる、政策決定作成の過程を対象とするものであって、それは、古い歴史的・社会的状況の入力により、戦争が勃発し、その結果、出力として、新しい歴史的・社会的状況が生じ、それがフィードバックされていく全過程」であるとしている。その際、各国の指導者たちは「ウォー・ポリティクス」における中心的アクターとして位置づけられ、とくに彼らの思想と行動は戦争の方向性を決定する重要な要因である、としている。

本書は、全体で三部から構成されており、第Ⅰ部では、第一次および第二次世界大戦の背景・経緯・評価を論じており、続く第Ⅱ部では、連合国側の政治指導者であるイギリスのウィンストン・チャーチル、アメリカのフランクリン・ルーズベルト、ソ連のウラジミール・レーニン、同じくソ連のヨシフ・スターリンを論じ、第Ⅲ部では、枢軸国側のドイツのアドルフ・ヒトラー、イタリアのベニト・ムッソリーニ、日本の指導者として東条英機、同じく鈴木貫太郎を論じている。

本書の目次は次のとおりである。

序文—第二次世界大戦と「戦争指導者」

第Ⅰ部 第二次世界大戦—総力戦の展開と核兵器の登場

第1章 第一次世界大戦から第二次世界大戦へ

第2章 第二次世界大戦の背景・推移・結果

第3章 第二次世界大戦の評価と課題

第Ⅱ部 連合国側の政治指導者

第1章 イギリス……チャーチル

第2章 アメリカ……ルーズベルト

第3章 ソ連……レーニン

第4章 ソ連……スターリン

第Ⅲ部 枢軸国側の政治指導者

第1章 ドイツ……ヒトラー

第2章 イタリア……ムッソリーニ

第3章 日本……東条英機

第4章 日本……鈴木貫太郎

結語

以下では、本書の内容を紹介していく。

第Ⅰ部「第二次世界大戦—総力戦の展開と核兵器の登場」、第1章では、第二次世界大戦を指導した各国の政治指導者たちがいかなる思想、イデオロギー、世界観を持ち、リーダーシップを発揮したのかという課題を考察する予備作業として、ヨーロッパにおける第二次世界大戦勃発の背景の一つとして、第一次世界大戦で半端に停止した清算を挙げ、第一次世界大戦の背景、推移、結果を分析している。

第2章では、第1章の第一次世界大戦に関する論述を踏まえ、第二次世界大戦の背景・推移・結果を概括している。本章では、第二次世界大戦勃発の長期的背景として、ドイツでは、ベルサイユ条約によって第一次世界大戦の戦争責任をドイツに負わせ、過酷な戦争賠償金を負担させた結果、ナチスの台頭を招いた、大恐慌後の大国が自国本位の経済政策を追求したことを挙げている。直接的な原因として、1930年代に“もたざる国”枢軸諸国（独伊日）が局地的侵略を強行したにもかかわらず、米英仏など大国が“宥和政策”によってその侵略を黙認したことを挙げている。

第3章においては、第二次世界大戦の評価と課題を検討している。本章では、歴史学および国際政治学の分野で第二次世界大戦の複合的性格がどのように理解されているかを紹介し、第二次世界大戦の基本的性格を、①反ファシズム戦争＝ファシズム諸国と反ファシズム諸国間の戦争、②帝国主義戦争＝帝国主義的諸国間の戦争、③民族解放戦争＝ファシズムや帝国主義からの民族解放のための戦争、であると整理している。近代国際体制の転換期・変貌期の過程での締めくくりが第二次世界大戦であったと位置づけている。

第Ⅱ部「連合国側の政治指導者」、第1章では、イギリスのチャーチルを取り上げている。幼年期、青年期、政治家、海軍相時代に言及し、三度にわたる落選、自由党から保守党への鞍替えをへて、第二次世界大戦勃発後、首相に就任したチャーチルは、戦時挙国内閣を組織し、大戦勃発初期のドイツ優勢の時期に、ヨーロッパではドイツに対抗するたった一つの国の指導者となった。また、チャーチルは、戦争を遂行する中で、大国イギリスの国力低下を痛感したのであった。チャーチルへの評価として、チャーチルの抱いた不滅のイギリス帝国への信念は、植民地における人権の蹂躪という立場から批判されるのは当然であるが、一方で、独裁国家、さらには社会主義への警戒を早い段階から発しており、優れた先見の明があったとしている。中東和平における貢献、国内における社会改革にも尽力したことも評価に値する、としている。

第2章では、第二次世界大戦を通じて国際舞台の主役の一角を担うことになるアメリカを指導したルーズベルトを取り上げている。ルーズベルトの幼少期、青年期、そして政治家としての経歴を述べ、ウィルソン大統領の下で就任した海軍次官としての経験、大統領に当選したルーズベルトによる、1929年の世界恐慌に端を発するアメリカ国内の経済大不況に対処するための「ニューディール政策」に言及している。そして、ヨーロッパでの戦争に対する孤立主義、戦端を開くまでの日本との外交的応酬、第二次世界大戦へと参戦が連合国の優位を決定的にしたことを説明している。連合国の優位が明らかになるとともに、ルーズベルトは、連合国の指導者たちと戦後構想を話し合った。そこでは、国際連合の設立、戦後の国際経済・金融体制などが討議された。戦時体制下での激務によって体の衰弱が著しかったルーズベルトは、戦争の終結を見ることなく、1945年4月12日に急死した。ルーズベルトの評価としては、国内的には連邦政府の機能を拡大し、対外的にはアメリカ外交を孤立主義から国際主義へと転換させたとしている。アメリカおよび世界に与えた影響力をかんがみて、ルーズベルトが最も偉大なアメリカ大統領の一人である、としている。

第3章では、世界初の社会主義国家を樹立した指導者であるレーニンを取り上げている。教育者である父の下で、民族的差別や偏見を嫌悪する感覚をやしない、最下層の貧しい人々に対する目をはぐくんだレーニンは、皇帝アレクサンドル三世の暗殺計画に参画したかどで捕らえられた兄アレクサンドルの自覚ある態度にふれ、帝政への不満や皇帝への怒りが生じた。兄の死によってレーニンは革命思想に傾倒するようになる。マルクス主義グループとの接触・活動の中で、具体的な政治活動を開始し、第一次世界大戦勃発に際して、レーニンは、帝国主義戦争においては各国の革命勢力が自国政府の敗北を目指さなければならないと主張する一方で、レーニンが率いる党がプロレタリアートの党として権力掌握を目指すことを自覚した。1917年2月、シュトペトログラードで始まった労働者の抗議に兵士も加わり、ニコライ二世の退位を実現させた。チューリッヒにいたレーニンは帰国し、4月、「4月テーゼ」を提起する。臨時革命政府を打倒するための武装蜂起は全国に広まり、10月、ソビエト政権の樹立に成功する。レーニンは、「平和に関する布告」を提案し、第一次世界大戦の交戦国に対し、即時講和と無賠償、無併合、民族自決を提唱した。1918年3月にドイツとの間で交わされたブレスト＝リトフスク条約によって広大な領土を明け渡し、ロシア国内への侵攻を止めることを確約させた。

一方で、国内では、農村から都市部への食料の供給が止まり、都市部の食料が危機的に不足し、農民の反乱も頻発した。反政府勢力としてのブルジョア・地主、白衛軍や外国に促された軍隊により内戦が激化していった。レーニンは、新経済政策 NEP を推進し、農村と都市部間の商業的自由化へと進展させた。度重なる暗殺とそれによる負傷、発作、後遺症は、レーニンとスターリンの対立が顕著になるにつれて悪化し、1924年1月に息を引き取った。レーニンの評価としては、当時レーニンが目指した社会は、今日では人類社会の目標社会として到底受け入れられるものではなく、ソ連が崩壊した今日、レーニンを失敗者として位置づける研究も見られる。ソ連末期における情報公開の一環として発表された数々のレーニンの書簡は、レーニンによって反革命分子の殺害、さらにはロマノフ一族の殺害が行なわれたことを明らかにしており、レーニンの評価は定まっていなかったとしている。

第4章は、第二次世界大戦中、ソ連を指導したスターリンを取り上げている。スターリンの幼年期、青年期、レーニンを崇拜する革命家への経緯に言及している。ロシア革命では、スターリンは地方の一活動家に過ぎず、1917年の10月革命においても重要な役割を果たしたわけではない。しかし、革命後、レーニンが内戦に対応するためにとった戦時共

産主義の方策は、後のスターリンによる統治のモデルとなったといつてよい。レーニンによって、党書記局における頑強な組織人として拔擢されたのがスターリンであったとしている。スターリンへの評価として、スターリンは、数々の策謀を駆使して党大会の決定を意のままにし、反対者を排除していく過程で、ソ連の政治機構を作り変え、ソ連政府を掌握したスターリンは、国内の集団化、工業化を推し進め、さらに大粛清を敢行した。第二次世界大戦中における対独戦では、1,000 万以上のおびただしい犠牲者を出しながらもこれに持ちこたえ、アメリカと肩を並べる連合国側の指導者として、「スターリン主義体制」を確立していった。戦後世界で二大超大国の一角を占め、旧ロシア帝国の領土を回復し、各国に共産党政府を成立させた。国内では、識字率が 100% 近くまで上昇するなど、スターリン時代に達成された功績は多数ある。しかし、これらの功績の下には、粛清と戦争の犠牲となった、歴史上いかなるものとも比較できない多数の犠牲者の存在が厳然と存在することを決して忘れてはならない、と強調している。

第Ⅲ部「枢軸国側の政治指導者」、第 1 章では、20 世紀最大の悪役政治家としてドイツのヒトラーを取り上げている。ヒトラーの生涯に関して、青年時代、兵士としての第一次世界大戦への従軍、ナチス党党首時代、ワイマール共和国首相、第三帝国総統への就任と第二次世界大戦を取り上げている。ヒトラーへの評価として、ヒトラーが世界の政治家たちと比べて、稀代の運命をたどった人物であり、ウィーンで美術学校の受験に失敗し、街をさまよう浮浪者の身から、ドイツという一国の頂点に上りつめ、一時期はヨーロッパの大半を支配下に入れるという、歴史上まれに見る立志伝中の人物であった、と評している。ナチス・ドイツ時代においてヒトラーが作り上げたファシズム体制は、民主主義が衆愚政治化する危険性を結果的に実証することになった事例として極めて重要な意義を持つものであり、大衆社会が独裁体制の温床となりうる危険性を知らしめた、人類にとって貴重な教訓であったとしている。

第 2 章では、イタリアの統帥として長期にわたって独裁的なファシズム国家を指導したムッソリーニを取り上げている。ムッソリーニの生涯について、幼年時代、青年時代、ファシスト党時代、首相、第二次世界大戦期における行動、そして「ファシズム体制」を述べている。ムッソリーニの評価として、勉強家で成績もよく、かなりの教養を身につけた、一流の演説家と知られていた人物であり、ドイツ国内におけるヒトラーへの評価と比べると、イタリアではそれほど憎まれてはいない。また、18 世紀における思想的所産が自由主義と民主主義、19 世紀におけるそれが社会主義であるならば、20 世紀に生まれた唯一

の思想的所産である「ファシズム」は、社会主義と民族主義を結合させることに成功したムッソリーニによるものであるとする。ムッソリーニは、第一次世界大戦後の混乱したイタリアを、秘密警察など「暴力的手段」を用いて恐怖政治下におきながらも、独裁的方法でもって救った一種の国民的「英雄」であった、と評している。しかしながら、ムッソリーニの転落は、ドイツと協調して軍事的膨張路線を採用し、第二次世界大戦への参戦を行なったことであるとしている。ムッソリーニは第二次世界大戦という政治的危機に翻弄された政治家の一人、と結論づけている。

第3章では、枢軸国側における日本の代表として、東条英機首相を取り上げている。職業軍人としての経歴、軍事組織内での出世、陸軍大臣、首相への就任の経緯を述べている。東条の評価として、自己に向けられた歴史的役割に確固として対峙し、また、勤勉さと忠実さを評価された好人物であったものの、祖国を敗戦の悲哀に向けさせた最大の責任者として、歴史的悪役の役回りの代表格としてあげなければならないのが東条であるとしている。東条は、アジア・太平洋戦争下において国家運営に携わるにはあまりにも政治家としての資質を欠いていた。その死まであくまで軍人・官僚としての職務を全うした東条には、卓越した行政能力を発揮できたとしても、政治家としての技量がなかった。歴史的役割を自覚して完全と立ち向かったものの、運命の流転によって「悪役」となってしまったことが東条の悲劇であったとしている。

第4章は、アジア・太平洋戦争末期において、日本の終戦工作に奔走した鈴木貫太郎首相を取り上げている。海軍軍人としての経歴、海軍および陸軍大学校教官、皇族・貴族の子弟を指導する学習院大学での教歴、艦隊司令官、連合艦隊司令長官、その後、軍人としては初めての侍従長および枢密院顧問に就任し、政治家としての道を歩みだした。1936年の2.26事件では襲撃に遭い重傷をおっている。鈴木への評価として、前出の東条英機を含む数多くの軍人政治家が軍人としての域を超えて政治家へと脱皮することができなかった一方で、鈴木は、軍人から政治家へと見事に脱皮を果たした人物の一人としている。終戦工作を巧妙に進める中で、鈴木は、自身の行政家としての「管理的リーダー」の資質の限界を認識しており、それに不足する「象徴的リーダーシップ」の部分を昭和天皇に発揮していただくことを通じて、日本の平和を回復する方途をさぐった、と高く評価している。

本書は、その目的に挙げられているように、戦争の悲惨さと無意味さの一端を知る者の役目として、未来を担う若者たちに、当時の指導者たちの言動を通じて、戦争への経緯と戦争の遂行について正確に伝えることにあるとする。その一環として大学における「政治

学の基礎」を学ぶ学生たちが利用できる参考書を目指している。すでに述べたように、第Ⅰ部で第一および第二次世界大戦の背景、経緯など総論を論じ、以下の指導者の章では、各指導者たちの経歴を記した年表が付され、章の最後には本書の読了後の更なる学習を促すための読書案内が加えられている。さらに、第二次世界大戦が「ナチズム」、「ファシズム」、「共産主義」、「民主主義」をめぐる異なる政治体制の国の間で行なわれたことをかんがみると、各国の政治指導者たちの思想やイデオロギーに反映された当時のその国の社会および政治状況を、本書では各国の政治指導者たちの経歴を通じて理解することができる。その結果、連合国側あるいは枢軸国側においても、戦争を遂行する際には、異なる政治体制である国同士の協力、あるいは反目などが生じる様をも理解できる。

しかしながら、いくつかの課題も指摘しなければならない。まず、第二次世界大戦勃発の背景を解明する上で、第一次世界大戦の遠因＝背景を分析しているが、第一次世界大戦後のいわゆる「戦間期」への検討があまりなされていない。ベルサイユ条約によって、過酷な戦争賠償を強いられたドイツでは、ワイマール憲法のもと、脆弱な政治体制のもとでの国内の社会・経済的混乱が後に合法的にヒトラーが政権を握る要因となったが、この点について、第Ⅰ部の中で簡単に触れられているだけである。また、枢軸国側の日本の政治指導者をあげているが、第Ⅰ部の総論部分では、主としてヨーロッパにおける第二次世界大戦の要因のみを取り上げているだけで、アジア・太平洋地域における日本の対外膨張行動の背景・経緯には触れられていない。このことは、各章においても同様である。また、本書の目的として、「指導者たちの人物像を多面的に描くと同時に、戦争がもたらした悲惨な現実を多くの人々に訴える」ことをあげているが、連合国側の指導者、とくにイギリスとアメリカの章では、これらの国が生み出した「悲惨な現実」についての記述はほとんどない。ソ連に関しては、対独戦における「悲惨な現実」には言及されているものの、ソ連軍による虐殺などについての記述はほとんど見あたらない。一方の枢軸国側では、指導者たちの蛮行が強調されている。戦争全体を見渡した際の「悲惨な現実」に偏りを感じるのは評者だけであろうか。

しかしながら、本書は、各章を異なる執筆者が担当しているため、その結果生じる内容の不統一であり、初学者が手に取り、第二次世界大戦を、歴史的出来事の単なる暗記項目から、それとは違った別の角度から、たとえば本章で展開されるような政治指導者たちの生涯を通じての理解を促す、優れた著作となるであろう。

(すえつぐ としゆき 専修大学法学部兼任講師)